

産地の研究室から/地域ブランドを育てる(22)

リレ一随筆

ユリ

(新潟県農業総合研究所園芸研究センター 田中雅生^{たなかまさお})

はじめに

ユリは、日本や中国など東洋にその原種の多くが存在するが、それらがアメリカやヨーロッパに渡った後に品種改良が進み、現在の切り花用品種の基礎となっている。国内でもスカシユリの育種は行われ、多くの品種を作り出してはいるが、オランダの育成数は圧倒的に多く、また、輸入球根の価格低下および隔離検疫制度の廃止とともに、国内への流入量が増加している。

園芸品種の主流はスカシユリ、テッポウユリ、オリエンタル系ユリであるが、近年では草姿のボリューム感、香りの良さが引き立つオリエンタル系ユリの評価が高く、新潟県においても、スカシユリとともに生産が特に拡大されている。

新潟県農業総合研究所園芸研究センター

当センターは、昭和34年新潟県農業試験場から分離独立し、「新潟県園芸試験場」として発足した。園芸についての取り組みは、遠く明治7年新潟県樹芸場が開設されたときからであり、本格的な試験研究に着手したのは、大正11年北蒲原郡京ヶ瀬村に専門の圃場を開設したときからである。昭和8年には新津市七日町に移転、さらに昭和56年、北蒲原郡聖籠町・紫雲寺町両町にまたがる現在の場所を選定し、圃場および諸施設の改善整備が図られた。

また、平成9年には県内の農業関係試験研究機関の機能を統合し、各種研究機能を充実強化するため、「新潟県農業総合研究所」が新設され、当園芸試験場

は新組織体制の下「園芸研究センター」として発足し、それまでユリを扱ってきた花き課は育種科および栽培・施設科の2科に分かれる体制となった。

新潟県におけるユリ育種の歴史

新潟県にはササユリなど数種の原種が自生している。育種の歴史は古く、当センター、県佐渡農業技術センターのほか、民間での育種も盛んに行われた。

民間育種の歴史は昭和20年代にまでさかのぼる。当時、発足したばかりの堀之内町花き園芸組合でユリの在来品種を栽培していたが、切り花としての商品価値が低いものであったため、品種間や種間交雑により優良系統の育成が行われるようになった。

最初に育成されたのは、昭和30(1955)年、滝沢久寛氏による朝鮮ヒメユリとミチノクヒメユリの交配による「越路姫」で、これを皮切りに新品種育成が進んだ。また、鈴木和太郎氏による「エンチャントメント」のウイルス罹病抵抗性系統の作出など、両氏を中心に次々と新品種が育成されていった。中でも昭和50年以降育成された「紅の舞」、「マイプレティ」、「サマーキング」等は夏場の抑制作型にもよく適応し、輸入品種が流入する中、これらのオリジナル品種は、産地の主力品種として現在も栽培されている。

このような民間育種家とは別に、当センターおよび佐渡農業技術センターでも数々の品種が生み出されている。当センターでは昭和50年代に「紅姿」など13品種、平成4年には「オレンジギフト」、「オレンジプロッサム」の2品種と、スカシユリでは数多くの品種を育成してきた。また、種間雑種の育成に関しては昭和38年から進められ、昭和63年には「スイートメモリー」(カノコユリ×ヒメサユリ)が育成された。

佐渡農業技術センターにおいても、昭和52年の「おけさきすかし」をはじめ、「さどこがね」、「べにせんか



園芸研究センター育成品種「オレンジプロッサム」



ボックス栽培

く'等多くのスカシユリ新品種が育成されてきた。

以上のような県内育成品種および国内・海外育成品種を、当センターでは保存し、現在も新品種の育成に向けて取り組みを行っているが、その保存品種数はスカシユリで約150品種、テッポウ系で7品種、さらにオリエンタル系ユリで約50品種、合計200品種以上と数多く、今ではここで見られない品種も存在する。また、現在検定中、または交配母本用の育成系統として約150系統が保存されている。

新潟県における栽培の現状

県内のユリ栽培の歴史は前述の育種経過からもわかるように古く、また産地は海拔数mの平場から中山間地、500mほどある山間地と、県内全域に及んでいる。球根養成・切り花栽培ともに行われており、特に切り花栽培は近年目覚ましく出荷量を増やし、ともに全国トップクラスの実績をあげている。

主に生産されているのはスカシユリとオリエンタル系ユリである。スカシユリについては、県内育成品種および輸入品種の球根養成から切り花生産まで行われているが、オリエンタル系ユリについては輸入品種の小球を購入しての1作養成、および養成球、購入球を用いた切り花生産が中心となっている。

ユリの病害虫で特に大きな問題となっているのはアブラムシ、葉枯病である。アブラムシはモザイク病(CMV, TBV-L, LSV)を伝搬するため、販売球の養成時には特に注意が必要で、春先は圃場全体を寒冷紗で被覆したり、定期的な殺虫剤散布を行うなどの措置が必要である。葉枯病(ボトリチス菌)は高温多湿時に発生しやすく、葉だけでなく、蕾およびその後の開花花卉にも病徴が現れ、切り花の品質低下を招いてしまうため、定期的な殺菌剤散布が必要となる。またこれらや他の病害虫の発生・拡大を防ぐ意味で連作は避けられている。

近年の県内ユリ生産で大きな伸びを見せているのは



園芸研究センター本館正面

オリエンタル系ユリの切り花生産で、現状では冬期が少量となるものの、ほぼ通年で出荷できる栽培体系となるよう、作型の拡大が進みつつある。ただし、オリエンタル系ユリについては生理生態の解明がまだ不十分であり、また品種の変遷も早く、各品種の特性を十分引き出した高品質の切り花周年生産となるにはまだ時間を要する状況である。特に夏季高温時に定植となる抑制作型では、草丈がでない、葉焼け・プラスチック・奇形花等の生理障害が発生しやすいなどの問題点がある。これを回避する手法として、生育初期を低温状態で管理できるボックス栽培や芽伸ばし処理などの取り組みがされ始めている。

当センターでは、平成7年よりボックス栽培の試験を行っており、低温処理の温度および処理期間の検討、培地の選定等の観点から研究を進めている。県内の産地でも廃トンネル(常時12~13℃)を利用してのボックス栽培が取り組まれており、夏期定植作型の切り花品質向上につながっている。

人事消息

(7月16日付)

小島浩司氏(農産園芸局農産課農産園芸専門官兼植物防疫課)は通商産業省基礎産業局化学課長補佐(化学肥料班長)に

○計報

西野 操氏(元 静岡県柑橘試験場研究技監, 前(株)

トモノアグリカ常任顧問)は、6月27日肺ガンのため死去。享年68才。

昭和47年6月より58年12月まで、本誌編集常任委員。

上田浩二氏((社)農林水産航空協会 前会長)は7月13日呼吸不全のため死去。享年71才